

生まれ故郷の「記念碑」

故郷の深谷周辺の様子を描いた作品の一つが『お父さんの村』です。

平成十四年（二〇〇二）十月に「北川千代顕彰会」が、千代の功績を後世に残そうと、城址公園通り沿いに建立した文学（記念）碑には、当時の自然豊かな春の情景が伺える一文が刻まれています。



碑文



四月になると、
畠の麦のほはのび、
なのは花はちやちやと
黄色くさきはじめ、
利根川へはいる
新川の土手には、
たんぽぽや、
れんげそうの花がさいて、
村はまるで絵のやうに
きれいになりました。
「お父さんの村」より

千代時世の句

猫のため少しあけおく 寒さかな
種子一つ 残さで散りぬ 寒椿



▲ 1894～1965

山武市（蓮沼）ゆかりの児童文学作家

『北川千代』をご存じですか？

名作『絹糸の草履』で知られる、童話作家の北川千代が蓮沼の地に移り住んだのは、昭和十五年（一九四〇）のことであった。当時四十六歳であったが、蓮沼村殿下（現山武市蓮沼口）にある「汐入沼のほとりの家（水荘）」を仕事場として、『青い麦の穂』など数多くの作品を残した。

【蓮沼村史の記述から】

六十三の作品の内、三十三作品は蓮沼の仕事場で書かれました。

蓮沼の様子を作品にした『村のたより』や地域の方言を巧みに使った『小さいあらし』があります。「ゆかりの著名人」ながら、年配の方でさえ「名前しか知らない。」というのが現状のようです。

そこで、多くの方々の「理解・協力」を発刊されている資料をもとに紹介します。

蓮沼がモチーフと思われる

千代の代表作

「ほら太東岬と銚子の犬吠埼との間に、九十九里浜っていうのがあるだろう。
ほとくのきた村はその長い海岸のちょうどまん中ごろなんだよ。」

この村は海に面しているけれども、漁をしているのは浜ぞいの方の人たちだけで、あとはたいていお百姓だ。
いまはもう春で、地引きもそろそろはじまるから元気づけよう。

（『村のたより』より）

「浜ではまい朝地引きあみの板木（ばんぎ）が鳴ります。
そしてそれを手つたえは、だれにでも魚をわけてくれるのです。」

トシ子やテル子の友だちにも、そのすけつと（助つ人）に行くものはたくさんいました。
「だって売るほどはくれめ。」と、
ねいさんだけにトシ子の方が慎重です。
「そしたらうちで食つたらよかべ。そいだって、買わないだけうちの得くだ。」

「そうだなあ。じゃ地引きに行くべか。」
「うん、行くべ行くべ……」
（『小さいあらし』より）



▲千代生誕の地
日本煉瓦製造(株)跡地
現在の資料館

▼愛用したメガネとペン



▼千代が自宅で使用した火鉢



晩年の千代の肖像／肘をかけているのが下の写真の火鉢 →

▼晩年を過ごした蓮沼の自宅 「池すのおばさん」と 呼ばれた由縁



千代の執筆作品や 翻訳作品



▲花の地球



▲青い麦の穂



▲みつばちマーヤの冒険

※掲載資料のご提供に感謝申し上げます。

- ・ご遺族様やゆかりの方々
- ・さいたま文学館様
- ・深谷市（人権政策課）様
- ・北川千代顕彰会（深谷市）様
- ・山武市歴史民俗資料館様

<2021年12月発行：蓮沼むらづくり協議会>

◇掲載の写真は、上記の皆様提供の他、深谷市教育委員会様発行の冊子「深谷で生まれた児童文学作家：北川千代」から転載させていただきました。

北川千代 誕生

名作『春やいづこ』で知られる童話作家の北川千代は、明治三十七年（一八九四）埼玉県大里郡大寄村敷免（現在の深谷市）で生まれました。父の後は、東京府の士族、母のちようは新町の富沢氏の人といわれています。

俊は渋沢栄一が設立した日本煉瓦会社の工場長として活躍し、ドイツに留学して新しい技術を持ち帰り、日本煉瓦の品質を飛躍的に向上させました。

北川家は東京の西大久保にありましたが、家族とともに埼玉に赴任した後は、工場内の社宅で生活しており、千代もこの社宅で生まれました。

当時市内最大の工場の責任者の娘であった千代は優しい父母に囲まれ、経済的にも裕福でした。9人兄弟の長女であった千代には、3人の兄と妹が2人、弟が3人いました。

長兄の隆三と末弟の文夫は画家、弟の武夫は初めて『ピノキオ』を紹介した翻訳家、というように千代の兄弟には、絵画や文学を志す者が多く、これはドイツ留学の経験を持つ父の影響だとされています。



東京駅を模してレンガ調の造りで改築された JR 深谷駅

初代PTA副会長

昭和二十三年（一九四八）三月、蓮沼村小・中学校PTAが発足し、千代は初代副会長に就任します。

子どものいない千代でしたが、自ら特別会員としての入会を申出たうえで、役員に推挙されたと聞きます。

また、学校へ自らの作品をはじめとする多くの図書を寄贈し、それは「北川文庫」と称され、子どもたちに親しまれました。



千代の残した児童文学

児童文学者としての道を歩んだ千代は、多くの作品を残しました。中には竹久夢二が挿絵を添えるものもありました。

外国の童話の紹介にも熱心で、『アンデルセン童話』『家なき子』『ピーターパン』等、今でも親しまれている作品も手がけました。

昭和三十九年（一九六四）には『みつばちマーヤの冒険』で、児童文芸家協会から第6回児童文化



千代 13歳

結婚と離婚

大正四年（一九一五）、人気作家の江口渙と結婚。大正八年（一九一九）、雑誌『赤い鳥』に童話『世界同盟』を発表します。以後、童話を新聞や雑誌に、少女小説を『令女界』『少女倶楽部』などに掲載しました。

大正十一年（一九二二）、二十二歳の時に江口と離婚し、その後、足尾銅山のストライキの指導者であった、高野松太郎と生活するようになります。



千代 29歳

蓮沼にきた千代

千代が蓮沼の地に移り住んだのは昭和十五年（一九四〇）のことでした。当時四十六歳であった千代は、殿下区にあった与謝野鉄幹、晶子夫婦の別荘を2千五百円で購入しました。

この別荘は4反歩（4千㎡）程の敷地のほとんどが池で、蓮沼の網元であった小川新兵衛氏が書齋として建築したものでした。千代は「汐入りの沼のほとりの家」と呼ばれたこの家を仕事場として『青い麦の穂』『お父さんの村』『沼のほとり』など数多くの作品を残しました。

昭和十八年（一九四三）、夫の松太郎が蓮沼の地で永眠した後、周囲の温かい好意に包まれ、千代は蓮沼に永住することを決め、東京世田谷の自宅を売って本籍も移しました。

当時の日記には「殿下の祭り。屋根屋さんより強飯（赤飯）を、局長さんよりすしを、女医さんより餅をもらっ」とあります。

蓮沼村の住民となった千代は、戦中から戦後にかけて、村の人々から「池すのおばさん」とか「沼のおばあさん」と慕われ、昭和四十年（一九六五）、七十一歳で永眠するまで、村の人になりきった生活をしていったといわれています。



大正15年頃の夫妻

私は、昭和十九年結婚し地元の医家へ嫁いだが、千代さんは私の夫と文字のことで気が合い、良くいらつやっていた。

東京へは、一ヶ月に二回位お出かけになられ、其のつと子供達に田舎にはないモダンなプレゼントを下された。



汐入沼のほとりの家（水荘＝池す）で

私も時々先生のお宅へお邪魔し、めずらしい物をこそうになった。

特にご主人様の実家の能登から、美味しいお魚などが届きめずらしかった。人生についての事、又ご自分の歩いてきた道をこまこまと話してくれた。

一番のショックは何と言ってもご主人さまの死でした。

泣いて泣いて涙も出ないと・・・

お葬式はごく簡単でした。それ以来特に文学に挑みました。思ひ出は尽きず、なつかしさが胸の中にぎゅぎゅ詰まっています。

平成十五年十一月十五日

T・K

「北川千代顕彰会」様宛ての手紙の一遍



▲代表作:春やいづこ 絹糸の草履



▲翻訳作品:ピーターパン等

北川千代さんの想い出

千代さんは、私が女学校二年生（数え十四歳・昭和十四年）の春、蓮沼へ越していらつやした。昔、我が家の別荘だった「池す」を買い、或る日おじちゃんと二人で我が家に挨拶に見えた。「ステキな方だなあ!」と思った。私の両親と話が合い、夜遅くまでおいでになった。

伝説の“汽車より速かった男”

▼連続優勝Ⅱ第5・第6回全国選手権男子マラソン
▼金栗と各20日間で走破Ⅱ下関―東京間、樺太―東京間

秋葉祐之

すけ ゆき

【山武市(連沼)出身】日本一の長距離ランナー

マラソンの父・金栗に見いだされた男



秋葉 祐之 (あきば すけゆき)
1895(明治28)～1968(昭和43) 連沼村出身
東京高等師範学校在学中からマラソン選手として活躍する。卒業後に中学校教諭となつてからも、金栗四三とともに、1919(大正8)年の下関―東京間マラソン、1922(大正11)年の樺太―東京間マラソンに出場。選手としての一線を退いた後は、1958(昭和33)年から、故郷の連沼村で教育長を務めた。

▲二人の熱き思いは箱根駅伝へ 秋葉(左) 金栗(右) / 出典:【東京坂道ゆるラン】WE B

さんむ 4月号 2019 No.157

▲「広報さんむ」2019年4月号で特集掲載 <中ページで紹介>

▼100年前の足袋シューズ (樺太―東京間の走破時)



◆日本が初めてオリンピックに参加した1912(明治45)年のストックホルム大会では、金栗四三(かなりしろう)がマラソン競技に出場しました。金栗は「日本マラソンの父」とも呼ばれ、2019年NHK大河ドラマ「いだてん」でも注目された人物。

◆この金栗に才能を見いだされ、共に陸上競技の普及に努めたのが、旧・連沼村出身の秋葉祐之。

◆秋葉は、教員養成機関であった東京高等師範学校(現・筑波大)で金栗の指導を受ける。在学中は、日本陸上競技選手権の25マイル(約40km)競技で走破を果たすなど、長距離ランナーとしての才能を開花。

◆卒業後、秋葉は理科の教員として木更津中学校(現・県立木更津高)へ。教壇に立つ傍ら、オリンピック選手など一流の陸上選手を招き、生徒たちとの交流の機会づくりなど、陸上競技を熱心に指導。

◆1922(大正11)年には金栗と共に、約1600㍑を走破する樺太―東京間マラソンなど、多くの人々にマラソンの楽しさを伝えました。



もう一人のいだてん

秋葉祐之 特別企画展

▲この展示は、東京2020オリ・パラ大会の500日前を記念して、2019年3月に山武市が開催した特別企画展。

秋葉祐之(1895-1968)のあゆみ



秋葉祐之にかかわる出来事		社会の出来事	
1895年(明治28年)	5月 1日 千葉県武射郡連沼村(現・山武市連沼)に生まれる		
1912年(明治45年)		7月14日	第5回オリンピック・ストックホルム大会が開催され、金栗四三が日本人初マラソンの部に出場
1916年(大正 5年)	3月30日 千葉県師範学校(現・千葉大学)卒業		
	4月 東京高等師範学校(現・筑波大学)入学		第6回オリンピック・ベルリン大会が第一次世界大戦の影響で開催中止
1917年(大正 6年)	4月27～29日 「東海道五十三次駅伝競走(京都～東京)」に出場し、関東組の優勝に貢献		
	5月 3日 校内徒歩部春期長距離大会で407人中1着になる(距離: 3里5町(約12.3km)、時間: 40分15秒)		
	7月22日 富士登山競走第2組1着になる		
	9月30日 奥都50周年記念京浜間25里(約98.2km)マラソン競走会予選会出場		
11月	第5回日本陸上競技選手権大会男子マラソン1着(距離: 25マイル(約40.2km)、時間: 2時間38分22秒)	11月 9日	世界初の社会主義国ロシア・ソビエト共和国が成立
1918年(大正 7年)	2月 第1回10マイル短縮マラソン1着		
	10月 2日 校内徒歩部秋期長距離大会で1着になる(距離: 6里13町(約25km)、時間: 1時間37分12秒)		
	11月 第6回日本陸上競技選手権大会男子マラソン1着		
11月10日	大日本体育協会主催第6回陸上競技大会優秀記録賞を受賞する(11月3日開催10里競走、時間: 54分24秒)	11月11日	第1次世界大戦終結
春	校内徒歩部春期長距離大会で250人中1着になる(距離: 3里5町(約12.3km)、時間: 41分15秒)	4月	ハリマヤ足袋店がコガゼを取り除き甲紐をつけた「ゴム底の「金栗足袋」」を発売
7月22日～8月10日	金栗四三と下関―東京間1200kmを20日間で走破する		
1920年(大正 9年)	3月26日 東京高等師範学校(現・筑波大学)卒業	2月14～15日	第1回東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)開催
		8月22日	第7回オリンピック・アントワープ大会が開催され、金栗四三がマラソンの部に出場
1922年(大正11年)	8月 金栗四三と樺太―東京間1600kmを20日間で走破する		
1924年(大正13年)		7月12日	第8回オリンピック・パリ大会が開催され、金栗四三がマラソンの部に出場
1958年(昭和33年)	5月 1日 連沼村の教育長に就任		
1968年(昭和43年)	10月 8日 73歳で死去		

金栗さんに素質を見いだされ、
マラソンランナーとして開花

もう一人の
「いだてん」
秋葉祐之さん

今年のNHKテレビの大河ドラマ「いだてん」東京オリムピック囃しの前半の主人公は金栗四三さんです。1912年（明治45年）第5回ストックホルム大会に日本人で初めてオリンピックに参加「日本のマラソンの父」として知られる金栗さんですが、単に自分がランナーとして走るだけでなく、有為な人材を育てあげることにも尽力します。金栗さんに見いだされた一人が蓮沼村（当時）の秋葉祐之さんです。祐之さんは各競技会で好成績を収めると同時に、師の金栗さんと二人三脚で全国を駆け巡っていきま

す。祐之さんご子息の誠さん（86歳）にお父さんの思い出を語って頂きました。写真の祐之さんの優しい面影にそっくりです。



父・祐之さんと金栗四三さんの思い出を語る秋葉誠さん

誠さんは、祐之さんから聞いた思い出のエピソードを懐かしそうに語ります。4歳年上の金栗さんとはこの前年にマラソンでストックホルム・オリンピック大会に出場途中棄権に終わりますが、翌年には東京高等師範学校（現・筑波大学の）の徒歩部（陸上部）室長になり、鍛えがいのある若手ランナーを探し訪ねていたのです。



下関—東京間1200kmを力走する秋葉祐之さん（写真中央）



下関—東京間1200kmゴール直前の祐之さん（写真中央左）と金栗四三さん（玉名市立歴史博物館提供=右の写真も）

▼「広報さんむ」2019年4月号で特集掲載



ニングの重要性に先鞭をつけるものとなりました。

さらに、22歳のときの「東海道五十三次駅伝競走」が圧巻です。京都—東京間516キロを23人のランナーがたすきをつないでゴールを目指します。祐之さんは区間最長距離（28キロ）となる掛川—藤枝

間を任せられます。ところがアクシデントが発生。その模様を「陸上競技のルーツを探る」（筑波大学陸上競技部OB・OG会）では次のように記しています。

「見附—掛川間では関東組の古横泰選手（一高）が左足アキレス腱断裂のため走行不能になり、次走者の秋葉祐之選手（東京高等師範）が車で迎えに行つて西島から12里48キロを4時間38分かけて走破するエピソードがありました」

また、1919年（大正8年）には祐之さんは金栗さんを訪ね「高師徒歩部に籍を置いて記念に、一緒に持久力テストをやりたい」と、下関—東京間の1200キロ走を持ちかけます。日程を調整し、7月22日に下関をスタート。二人はマラソンを広く普及させる狙いもあり、沿道の人たちとふれあいながら20日間で走り切ったとい

います。

蓮沼を訪れた金栗四三さん

東京高師を卒業した祐之さんは、本更津中学校（現・本更津高校）をはじめ全国の学校で生物の教師として教鞭を執ります。勉学のかたわらマラソンの楽しさを伝えていきました。

その集大成ともなるのが、金栗さんと二人で走った樺太—東京マラソン。1922年（大正11年）、20日かけて走り通しました。

「樺太や北海道では熊が出るというので、軍隊や土地の青年団が銅鑼を鳴らしながら伴走してくれたようです。マラソンの宣伝のため

に走ったと言っていました」と、誠さんは祐之さんを偲びます。その後、祐之さんは、日本統治下にあった朝鮮の開城商業学校で校長を務めます。



樺太—東京マラソンのユニフォームと足袋。足袋には「金栗足袋」の銘がある。大きさは10文（約24cm）と小ぶりである

日本全国を駆け巡り、
青少年にマラソンの楽しさを広める

マラソンの両雄
金栗 秋葉
昨夕着京
樺太から三百四十里
を走破した新記録
両氏素顔を元氣で語る

樺太—東京マラソンのときの祐之さん（左）と金栗さん（玉名市立歴史博物館提供）

<蓮沼の偉人伝承事業>

蓮沼むらづくり協議会・令和7年度事業

【山武市（蓮沼）出身】球界屈指の快速球ピッチャー

鈴木孝政

▼蓮沼中学校から成東高校へ進学、速球を武器に1年秋からエースの座に着く。

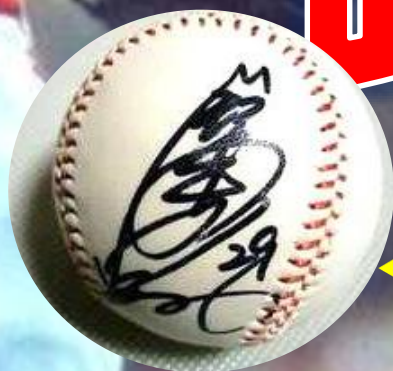
▼1972年のプロ野球ドラフト会議で中日ドラゴンズに1位指名されて入団。

▼150km台の伸びる快速球を武器に、ロングリリーフもこなす救援投手で活躍。

現「山武市

名誉スポーツ大使」

▲出典：「週刊ベースボールonline」Web
『球界200人が選んだ速球王ランキング
第12位・鈴木孝政』より



◀現役時のサインボール

▼【心揺さぶる名言】

「相手はごまかせても、ボールはごまかせませんでした。」
（1989/10/7の引退会見にて）

▼引退後は、野球解説者、投手コーチ、二軍監督を歴任

▼2016年「ドラゴンズベースボールアカデミー」初代校長に就任

▼2018年3月「山武市名誉スポーツ大使」に就任



▼蓮沼中

▼成東高

▼中日ドラゴンズ



Dragons

“背番号29”の由来(球団から提示エピソード)

↓昭和29年生まれで、実家がお肉屋さん。



元 プロ野球選手(中日ドラゴンズ:投手)

鈴木孝政 (すずき たかまさ) 背番号 **29**

1954(昭和29)年7月生まれ 右投・右打 山武市(蓮沼)出身

選手歴

山武郡蓮沼村立蓮沼中学校
千葉県立成東高等学校(甲子園出場経験なし)
1972(昭和47)年ドラフト1位指名
初出場:1973(昭和48)年4月19日
最終出場:1989(平成元)年10月14日
ドラゴンズ一筋(実働17年:35歳で現役引退)



通算成績

586試合登板 124勝 94負 96セーブ (121SP)
(うち先発 170試合) 防御率: 3.49 奪三振: 1006

タイトル・表彰・記録

最多セーブ王 1回(1975年)
最優秀救援投手賞 2回(1976年・1977年)
最優秀防御率賞 1回(1976年)
カムバック賞 1回(1984年)【28試合登板 16勝8負】
オールスターゲーム出場 7回(1975~1978・1984・1985・1987)



経歴・etc

- ・快速球を武器にロングリリーフもこなす救援投手として活躍(セリーグで最も球の速い投手と称される)
- ・1982年シーズン途中から先発に移り、その後は技巧派の先発投手に
- ・長嶋茂雄・長嶋一茂親子と公式戦で対戦した唯一の投手
- ・著書「流汗悟道:野球で学んだ人生哲学」(1995年:海越出版社)
- ・コーチ歴 中日ドラゴンズ(1995年~1997年・2004年)
- ・二軍監督歴 中日ドラゴンズ(2012年・2013年)
- ・2016年「ドラゴンズベースボールアカデミー」初代校長に就任
- ・2018年(平成30年)3月「山武市名誉スポーツ大使」に就任

選手↓投手コーチ(二軍・二軍)↓二軍監督

中日ドラゴンズ一筋



◀▲道の駅オライはすめまにゆかりの品を多数展示

